

ように、歴史的町名を《》カッコで明示した表記を行い、通称が計77路線に付けられています。

こういったことから、仙台市においては、道路愛称の存在が市民に広く受け入れられる下地があるといえるでしょう。

平成7年度からは、魅力あるまちづくりの推進という観点から、道路愛称命名に際し仙台市内各区で選考を行う制度が制定されました。この制度における、住民団体からの要望による命名2例、愛称公募による命名1例を紹介します。

「瞑想の松通り」(平成23年3月)及び「昭和市電通り」(平成25年7月)は、住民からの要望により命名に至ったものです。地元の町会連合会あるいは住民が設立した命名実行委員会から、該当路線に愛称を付けたいとの要望が出されました。前者では愛称案も提案され、後者では実行委員会による愛称募集が実施されています。要望者との意見交換、地域住民や「まちづくり協議会」等の意見聴取などを経て、該当区の愛称命名選考会議において愛称案が選考されました。

愛称の公募は、2.(1)でも述べた「薬師高砂堀通り」(平成27年11月決定)の例において行われました。区の要綱により、住民等で構成される「道路愛称選定委員会」が設置され、愛称の公募方法や選定基準等が討議・決定されました。委員会での検討に際し、区では、この地区の特徴の理解を助けるため、歴史的建造物「薬師堂」や地域の資料、エリア情報誌等を提供しました。委員会はこれらを踏まえ数回の議論を経て応募作品から複数案に絞り込みを行い、それを受けて区長の選考が行われました。

該当区からの報告を基にして市長により決定された道路愛称は、標識板が設置され、市作成の地図に掲載されます。住民の暮らしの中で愛称が利用され定着してだけでなく、自分たちがつけたという誇りと道路への愛着が生まれる効果も見られるということです。

◆(まとめ) 親しみと誇りを培う道路愛称の意義

このように、道路愛称が示す内容や由来、ある

いは命名への住民の関与によって、住民の道路や地域への親しみが芽生え、地域への愛着や誇りが培われます。そして道路愛称の標示板設置や地図掲載という具体的で効果的な手法と相まって、地域の魅力を有効に発信していくことができます。道路愛称は、地域の魅力を内外に伝えるためにも有効です。

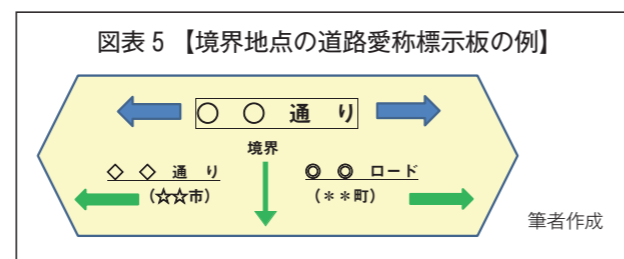
4. 市町村連携による道路愛称の活用

(1) 連携によるわかりやすさの実現

道路は、自治体の境を越えて繋がっていきます。自治体の境界を自在に越えていく通行者にとっては、気づかぬうちに道の名が変わってしまうと、わかりにくく混乱を招きかねません。特に自転車による地域巡りでは、容易に複数の市町村を通過します。その際にも共通の名称が続く道路なら、安心して走ることができます。

わかりやすさのためには、市町村域を越えた共通の道路愛称設定も一つの方法です。その場合、地域の特徴や住民の思いが籠められた愛称の尊重と、定着済みの愛称の変更回避のため、既定の道路愛称との併記が望まれます。あるいは、境界で名称が変わることを示すため、境界地点を挟む両側の道路愛称を、一つの標示板に示すことも考えるべきでしょう(図表5)。標示板の作成・設置において共通ルールを定めたり、デザインの統一感を図ったりなど、訪問者へのわかりやすさに配慮することも大切です。

そして、これらを実現するには、道路の通る自治体間の連携が不可欠です。



(2) 連携による効果的な魅力発信

道路の市町村域を越え複数の地域を貫くという性質は、河川や鉄道と共通しています。河川流域や鉄道沿線であることを軸に、複数の自治体

が連携した事業は少なくありません。

河川流域の例では、「多摩川流域11自治体交流イベントラリー」が実施されています。また荒川流域では、都県境も越えた16区市等により、事前防災行動計画の試行、検討が行われています。鉄道沿線での取組には、JR常磐線沿線地域活性化を目的とした「JOBANアトライン協議会」の例が挙げられます。いずれも、複数自治体の協力によって一層大きな効果を生む取組、または、一自治体のみでは解決が困難である課題解決への取組の事例です。

同様に、道路沿線においても連携の可能性はあります。一例として、多摩地域に点在する複数の観光スポットの繋がりを、道路愛称によって表現することができるのではないのでしょうか。例えば外国人観光客に人気の高尾山と深大寺、吉祥寺とジブリ美術館や江戸東京たてもの園などの繋がりを、道路愛称により表すのです。道路愛称で可視化された繋がりによって、広範な地域の回遊性を高めることが可能になるでしょう。各自治体が連携し、道路愛称を活用して周辺自治体の地域資源も併せて互いに発信しあうことは、大きな意義を持つと考えられます。

◆(まとめ) 連携により道路愛称の有効活用を

広域において道のわかりやすさを実現するためには、市町村間の連携が必要です。しかしそれだけでなく、複数自治体の連携による道路愛称の活用で、広範な地域の魅力の、一層効果的な発信が可能で

道路は必ず隣の自治体へ繋がっています。それを活かし、市町村が連携する魅力の発信に、道路愛称を役立てることができます。

5. おわりに

道路愛称は、地域外からの来訪者・住民共に、わかりやすさという利便性の向上をもたらします。この利便性を魅力として打ち出していくことは、今後ますます有意義なものになります。住民や来訪者が徒歩や自転車で地域巡りを安心して楽しめる環境を整え、それ自体を魅力として

発信するに当たり、道路愛称を活用できます。

また、既定の道路愛称の由来から、または新たに愛称命名に取り組む過程で、その地域の特徴を知ることができます。それは、住民にとって地域の魅力の再発見、地域への愛着の深まりに繋がります。そして、地域の魅力の発信は、標示板や地図で示す道路愛称を使って効果的に行うことができます。多摩・烏しよ各地の地域の魅力が、道路愛称を通じて地域の内外に伝わるような名称や命名方法などを工夫しましょう。

わかりやすさの実現や地域の魅力の再発見・発信は、それぞれの自治体が独自に取り組みます。しかしそれに加えて、市町村域を越え繋がっていくという道路の性質から、その繋がりを活かした市町村間の連携の中で道路愛称を活用すると、より大きな効果を得ることができます。多摩地域の「エリアセールス」として発展させていくこともできるでしょう。

道路愛称は、様々な可能性を持っています。ぜひ活用を考えてみてはいかがでしょうか。

[1] 昭和39(1964)年オリンピック東京大会を前に、「東京を訪れる内外観光客の飛躍的増加が予想されたため、都内の観光を容易にするとともに都民の交通の利便を図ることを目的として、主要な道路にわかりやすく親しみやすい名前をつける」ことを目的に事業が実施された。(平成25年4月19日第1回東京都通称道路名検討委員会資料「通称道路名設定事業の経緯及び概要について」)

[2] 神戸市「道路の愛称」、同市ホームページ
<http://www.city.kobe.lg.jp/life/town/road/aisyoh.html>
(平成28年9月16日アクセス)

[3] 江東区「区道の道路愛称名について」、同区ホームページ
<http://www.city.koto.lg.jp/seikatsu/douro/7421/7424.html>
(平成28年9月21日アクセス)

[4] 伊豆の国市「道路愛称選定事業」、同市ホームページ
<https://www.city.izunokuni.shizuoka.jp/tosikei/douroaisyoh.html>
(平成28年9月21日アクセス)

[5] 国土交通省道路局「通り名で道案内」ホームページ
<http://www.mlit.go.jp/road/torimeiji/>
(平成28年4月20日アクセス)

[6] 東京都「平成26年度国別外国人旅行者行動特性調査」、平成27年9月7日報道発表資料

[7] 東京都市長会平成25年度政策提言「多摩地域におけるシティプロモーションについてー市民に愛される、活性化したまちを目指してー」51ページ参照